

音節表を利用したピンイン教育

その他のタイトル	Using the Table of Pinyin Syllables to Teach
著者	高 倩蘇
雑誌名	関西大学視聴覚教育
巻	28
ページ	65-67
発行年	2005-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10112/12043

音節表を利用したピンイン教育

高 倩 藝

1. ピンイン学習の難点

外国語教育はほとんど発音から始まる。中国語も例外ではない。現在、中国語発音を学ぶには、ピンインと呼ばれるローマ字表記システムを覚えることから始まるのが一般的である。ピンインを学ぶ大学生の初学者は、「発音が難しい」という困難の外、「表記も難しい」という困難に直面しなければならない。本稿は、「表記が難しい」という困難の解決を試みた報告である。

表記が難しいというのは、表記のルールを覚えるのが難しいということで、以下の二点から起因するものと思われる。

イ、発音練習で覚えた記号と表記で使われる記号と必ずしも一致しない。

たとえば、発音で覚えたüは、表記として現れるのは、nとlの後だけで、むしろ少数である。多くはju、qu、xu、yuのように、uで表記される。すると、同じuという表記でも、発音が二通りある。どちらで読むかは、子音を見なければならないのである。また、発音で覚えたuei、uenも、実際子音が前にあるとui、unと表記され、別の発音のように誤解されやすい。

ロ、表記が同じでも音色が異なる。

例えばeiのeは、単独のeと発音が異なり、biのiとzhiのiとziのiは、どれも同じ音色ではない。

上述の例のとおり、表記の問題は、主に母音に集中しているのである。

多くの教科書は、単母音、二重母音、三重

母音、子音を、という順で紹介した後、日本語にない発音や、要注意発音、発音記号と表記の違いなど注意書きも羅列して発音部分の紙面を充実させているのである。

筆者も最初は、このような、教科書通りの順序で授業を進めていた。しかし、表記のルールなど、規則が零細になって、学生がカリキュラムで決めた短い発音訓練期間内にそれをマスターするのは非常に困難であることを痛感した。

2. 音節表のメリット

市販の入門書のほとんどが音節表を付録している。筆者は、ピンイン学習の難点を音節表を使うことで克服することを試した。音節表は発音そのものが難しい、ということに根本的な解決法が提供できなくても、表記が分かりにくい、という問題の解決には有効である。結論をいうと、音節表は、

- 一、中国語発音の全貌を見ることができる。
- 二、いろいろな省略表記が、一目で分かる。
- 三、発音の練習で、ドリルの材料として、この表が使える。

3. 実践：現場の再現

以下は朝日出版社の『話す中国語』北京篇1という教科書を例に、音節表を使って、教える現場を断片的に再現してみたい。紙幅の限りがあるため、典型的な母音のみ例としてあげよう。

第一課は声調（四声）、母音、三声の変調、

軽声、という順番の内容である。四声の勉強が終わったら、単母音の学習に入る。

この時点で、11ページ目の「音節総表」(音節表のこと)を紹介する。母語が日本語である学習者にとって、五十音図という発音図は幼少時代から慣れ親しんだものである。音節表は五十音図みたいなもので、同行の子音は発音が同じ、同列の母音も発音が同じであると説明する。

次に、中国語の音節がすべて網羅しているから、発音段階の目標の一つは、この表にある音節が全部正しく発音できることであると説明する。すると、一部の学生はその発音数の多さを嘆く様子。この時点で、この教科書の音節表は難しい発音や、まちがいがやすい発音を太枠で囲んでおり、そういう発音は少数であることを説明し、学生を安心させる。

それから個別の発音に入る。単母音中、a、iは、日本語読みと中国語読みは大差なく、またb、p、m、fなどの分かりやすい子音との組み合わせのba、pa、ma、fa・・・haまでもローマ字感覚で読んで問題ないので、学生にチャレンジさせる。この段階では、実は子音との触れあい、また「子音+母音」という仕組みにも馴染み始めるのである。

次はeという難しい発音を聞かせ、練習させる。すでにbからhまでの子音との触れ合いがあったので、それらがeと組み合わせた一覧を読ませる。子音が異なっても、母音の読み方が変わらないのが実感できる。さらに四声の練習と合わせて繰り返し練習させる。音節表ならではの、変化のあるドリルができるのである。

uの学習も同様の方法で進める。

次はü。üは発音が難しい上に、表記上もいろいろ規則があって、扱いにくい発音の一つである。発音は、コツを説明し、真似させるしかないのだが、表記上の問題は、ルール

の説明を後にして、まず音節表を観察させ、後で質問する。学生はüの一行を観察し、「上に二つの点がない表記がある」と答えてくれる。この時点で、ルールの説明をすれば効果的である。

二重母音のai、ao、ei、ouは日本語発音のローマ字感覚で読めるから、冗長な説明は不要で、教師が示したのを模倣させればよい。この群の母音は比較的簡単だから、この時点は、子音のzh、ch、sh、rを紹介する好機でもある。

母音の学ぶ順番は、音節表の方がよい。

ia、ua、ie、uo、üeも音節表を使って、学生に、ゼロ声母の表記の問題に気づかせる。

三重母音のiao、uai、iou、ueiはゼロ声母の表記と、省略表記に目を向けさせるのが重要で、それぞれの個所を観察させ、結果を聞く。

これで第一課のピンイン表記の学習が完了する。

第二課は[nとng]、子音(一部)という内容である。[nとng]のnはan、en、in、ian、uan、uen、üan、ünのグループを指す。[nとng]のngはang、eng、ing、iang、uang、uengのグループを指す。

まずan。これを、黒板に書く。それから、学生にそれは、音節表のどこにあるかを探すように指示する。それから発音の要点を簡単に説明して、模倣させる。子音と組み合わせたのを学生にチャレンジさせる。

次はen。上記と同じように進める。

次はang、engという順である。実は、上記の順序は、第二課の順序と少し違う。第二課の順序だと「an、ang、en、eng」・・・となる。この順序は初心者にとって似たような音声が続いているから、どれがどう発音すればいいかわからなくなりやすい。したがって、むしろ音節表の順序がよいのである。

正課における学習の順序が音節表と大きく異なる場合は、正課のほうを、練習として活用するとよいだろう。たとえば、CDやテープによる聞きとりの練習とか。正課のページは、「練習の答えが載っている」といったような活用もできる。

ongが終われば、音節表上、「介音なし」のブロックを勉強し終えたわけである。この時点で、「介音」の概念を導入し、次のブロックは「介音 i から始まる音声」、その亦次のブロックは「介音 u から始まる音声」・・・というふうに説明をすると、音節表の構造も理解してもらえらるだろう。

ianは太枠で囲んでいる発音である。この教科書の音節表は難しい発音や、まちがいやすい発音を太枠で囲んでおり、また傍白に一言注意書きを付けている。このような親切な音節表は、多くの他の教科書にも取り入れてほしい。

in、iang、ing、iongを学習する際に、子音 j、q、xを紹介する。

次はuan、uen、uang、uengという介音 u から始まる音声である。これらも、ゼロ声母の場合、表記はwan、wen、wang、wengになり、また、uenは子音と組み合わせる時unと表記するという規則がある。これも、学生に観察させ、観察の結果を報告させる。

次はüan、ün。この二つも表記の問題など、音節表を観察すればわかるのである。

これで、第二課の「n と ng」という部分が終わる。

以上を持って、母音の学習が終わり、次は、子音の学習が始まる。子音は本稿が取り上げる問題と関係が薄い。それについて報告

を一言でまとめると、既に母音の勉強の時に、子音が取り入れられていたため、これからの子音の勉強はほとんど復習のようなもので、楽になる、ということであろう。

以上、朝日出版社の『話す中国語』北京篇 1 という教科書を例に、音節表を使って教えた現場を再現した。

音節表を使ってピンインを教えると、学生には、中国語音節の全貌を見ることができ。また、いろいろな省略表記も、一目で分かるのである。教師にとって、ピンインシステムを紹介するのに、説明もしやすく、ドリルをさせるのもしやすい。

4. ピンイン教育に対する提案

筆者は近年音節表を使って、ピンインを教えている。筆者が便利に感じたのは、表記が同様でも、発音が異なれば、異なる列に配列する表である。たまに、表記が同じだけで、同じ列にする音節表がある。そういう表は、本稿で説明したように活用できない。

筆者が感じたのは、発音段階でぶつかった困難を解決するのに、一つの材料として、音節表が注目に与えるべきではないかということである。

ちなみに、本稿で列挙した朝日出版社の『話す中国語』北京篇 1 という教科書は、音節表のメリットに注目した教科書だといえよう。「c は k に非らず」などという傍白も、ユニークで効果的である。

これからの教科書は、もっと音節表の機能性を考え、工夫を凝らし、学生にとってよい勉強の道具、教師にとって良い教材として活用できるものになるよう期待したい。